

---

# 並でいいじゃないか、並で

万里雁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

並でいいじゃないか、並で

### 【Nコード】

N3528Z

### 【作者名】

万里雁

### 【あらすじ】

どうも、始めましてアツキーです。

この物語は多分普通の高校生の俺とどう考えても普通じゃない友人達の何処にでもある普通の高校生活をお送りしていく予定です！

笑いはあるのか！涙はあるのか！青春はあるのか！恋愛はあるのか！まったくもって考えはありません！

完全自己満足気味でお送りしていきますが、どうぞ見てやってください。

## 第1話 俺と奴等のクリスマスイブ（笑）（前書き）

始めまして、万里雁です。

自分で書いててよく分からなくなったりしてたけど、暇な時にでも目を通してやってください。

## 第1話 俺と奴等のクリスマスイブ（笑）

12月24日

皆さんにはこの日が何の日かお分かりだろう。

そう、あの彼氏彼女持ちのリア充共の1年に1度の大イベント『クリスマスイブ』である。

現在の時間は午後6時30分。

外は一面銀世界のホワイトクリスマス（合ってたっけ？）。

今頃世のリア充共は乳繰り合っている頃だろう。

え？俺が何をしてるかって？

そんなのお前決まってんじゃねーか。

1人ですよ。

自分の借りてるマンションの1室で、たった1人で夕飯の支度をしていますよ。

どうせ彼女居ない暦16年（自分の年齢）ですよ。

高校に入った所で彼女なんて出来ませんでしたよー！

だから彼女なしで寂しく過ごすクリスマスなんて慣れてますよ、へっちゃらですよ。

あはははは、あはははははは。

……自虐終了。

もう少ししたらあいつらも来る事だし、それまでに食材の準備しなくちゃ。

あいつら今日も部活あったらしいし、腹ペコのままうちに来るはずだから一応出来るだけたくさんのお食べ物用意しとかないと。

料理も出来上がり、さらに盛り付けテーブルに運んでる最中奴等は来た。

ピンポーン。がちやがちやがちや。

チャイムを1回押してからのあのがちやがちやはあいつだ、あいつらしか居ない。

毎回あいつらはどうやってこのマンションに侵入してきてんだろ、ここオートロックのはずなのに。とりあえずドアホンで止めとこつ。

「今行くから、静かにしとけ」

がちやがちやがちやがちや。

まるで返事のように返ってくるこの音。

一向に止めようとならない馬鹿どもにイラつきながらドアを開けると、そこにはサンタが居た。

3人も。

「「「メリークリスマス!」」」

「「……永遠にさようなら」

「待てーい」

目の前の状況を認めたくなくて、とっさに閉めようとしたドアの隙間に足をつままれた。

これじゃ閉められない、最悪だ。  
さらにあいつこじ開けようと手まで挟んで引つ張ってやがる。

「すいません、足と手抜いて貰えませんか？」

そうしないと閉めれないんで。

「抜いてもいいけど、抜いたらお前絶対閉めんだろ？」

「そうに決まってるだろ、俺の知り合いにサンタは3人も居ない。  
3人どころか1人も居ない」

永遠にさようならって言ったじゃん。

「んじゃ、抜けねーな。さっさと観念してドア開ける」

「嫌です。心の底から嫌なんです」

「や、こんな格好で来たのは謝るからさ、まじで開けてくんない？  
外の寒さまじでヤバイから。俺ら死んじまうから」

「結構じゃねーか。問題児が3人も居なくなってくれて、学校も喜ぶだろ」

もしかしたら俺賞状貰えるかも。

「いやいや、そうかもしれないけど、お前だつて嫌だろ？家の前で  
サンタの格好した奴が3人も死んだら。色々嫌な噂が立つちゃうよ  
？」

「新聞勧誘やら何やらの面倒臭いのが来なくなるだろうから願ったり叶ったりだ」

「いや、そうかもしないけど……そろそろまじで開けてくんない？ 後ろの2人が喋れない程度には死んできてるからさ」

「ちっ、しょうがねー。さっさと入りやがれー」

さすがに可哀想になってきたからドアを開けてやると、3人が雪崩のように入ってきた。

本当に顔が死んだかのように白かった。

「……生き返るー」「」

「おめえらそんな玄関の床で寝そべってないで、さっさとそのふぎけた服脱いでリビングで行け。料理はもう出来てる」

「……あいあいさー」「」

返事だけはいつちよ前のようだ。

あいつらさっきまで死人みたいだったくせに。

「……うおおおおおお！……」「」

「摘み食いした奴は叩き出すからな！」

リビングの方から馬鹿どもの雄たけびが聞こえてきた。

お互いに隣の部屋から苦情が来ても可笑しくないレベルだ、防音で良かった。

リビングに行くとサンタの服の下は制服だったのかワイシャツ姿の

馬鹿が、犬で言う所の『待て』状態でテーブルを囲んでいた。

「おお、よく待てたじゃん。んじゃ、いただき」

「違うだろ、今日は『メーリークリスマス』だ」

そんなのどっちでもいいだろ!?

「……メーリークリスマス」

「『メーリークリスマス!』」

「うめー!」

「何これ、めっちゃうめー!」

「やっぱり、アッキーの料理は最高だな!」

1人だけテンションの低い俺を置いて、奴等はバクバクと俺の料理を食い始めた。

3時間もの俺の努力が奴等の胃袋に消えるのに1時間もかからなかった。

「そこじゃおりゃあー!」

「はっはー!俺にそんなもんはきかんわー!」

「な、何だとー!?!」

何だあの3文芝居は。

そしてなんであんなのをBGMに洗い物をせにゃならん。  
今手に持つてるこの皿ぶつけてやるうか？

「ごめんな、アッキー。あいつらお前に全部押し付けちゃって」

そう言いながら洗い物を手伝ってくれてるのは、3馬鹿唯一の良心、  
橋田五郎。

現役高校生球児、身長180以上で顔は優男って感じだ、丸刈りだ  
けど。ちなみにポジションはファーストで、ジャイロボールは投げ  
られない。

ちなみに先程のサンタ事件でドアの間に足を挟んできたのがこいつ。

「別に大丈夫だよ、うちでクリスマスパーティー開くって決まった  
時点でこうなるの分かってたから。それに俺こういうの嫌いじゃな  
いし」

「そうか？お前がそう言うならいいんだけど」

「所であいつらは何をしてんだ？なんか棒みたいのでチャンバラし  
てっけど」

「ああ、この間ス〇ー・ウォーズの映画みたらしい。それでなんか  
ハマったんだって」

今更かよ…、公開されてから何十年経ったと思ってるんだ。

「あいつら馬鹿だからしょうがないよ。あ、これで最後だ」

洗い物が終わって橋田とリビングに戻ると、そこには力尽きた馬鹿が2人居た。

「お前ら何やってんだよ…」

「あ、アッキー、キューちゃん。洗い物お疲れー」

「飯も美味しかったし洗い物も出来るなんて、アッキーはいいお嫁さんになるね」

誰がお嫁さんになんてなるか。俺は男だ。

こいつらは上から井上翼と手塚卓郎。

特徴は…面倒臭いからいいや。

「なんか今アッキーとても失礼な事思わなかった？」

「俺もなんか馬鹿にされたような気がした」

ちっ、こんな時だけ勘のいい奴等だ。

しょうがない、こいつらも紹介しといてやるか。

井上は髪の毛を茶色に染めていて、かなりのイケメンだ。後サッカー部に所属してるけど、オーバーヘッドは出来ないし、この間無理やりやらせたら失敗した。

手塚はテニス部に入っている。零式ドロップをして欲しいと頼んだが出来ないらしい。

その中性的な顔立ちで女子にとっても人気だ。

てか、手塚だけじゃなくこいつら全員女子にはモテる。

橋田だって一年生にして野球部の主砲だし、井上はサッカー部のエ

「ストライカーだからだ。」

だからこいつらは入学してからの8ヶ月何十人も女子に告白され、不思議な事にその全てを断っていた。

いつも「リア充死ね」「彼女欲しー」とか言ってるくせに。(俺は毎回「お前らが言うか！」と心の中で突っ込んでいる)

皆さんお察しのようには、そんな彼等と違ってはっきり言って俺はモテない。

高校に入学してから1度だけ女子に呼び出された事があったけど、それはこいつらの好みを聞きたいだけだった。

まあ、そんなもんだらう。と思って、正直にこいつらが前に言っていた好みを教えてあげて、さらに少しだけ他の事もアドバイスしてあげた。

するとどうなるだろう？

結果として、俺に恋愛相談してくる奴(男子も含む)がたくさん生まれました。その中にはこいつらとは関係なく、「好きな人を振り向かせるにはどうしたらいいか」とか「彼との初デートどんな格好の方がいいのか」などという物まであった。

NOが言えない日本人の鏡である俺は全てに嫌々ながら答えてやった。

……笑えばいいさ。

彼女も居ないのに他の奴の恋愛相談や恋人との惚気話をクリスマスイブにまで電話やメールで聞かされてる俺を大口を開けて笑えばいいさ。

あはははは、あはははははははって笑えばいいだろ！

うわああああああん！

「アッキー何1人で百人相してんの」

はっ、

あぶない、あぶない。

もう少しで危ない所まで行っちゃった。

ありがとう、橋田。

君は俺の命の恩人だ。

「何でも無いよ。(どうせお前達には分からない事だよ!)」

「そうか」

「アッキー! さっさとクリスマスケーキ食おうぜ!」

「俺もケーキが食いてー!」

「そうだな、ちょっと取ってくるよ」

「よっしゃー! クリスマスはこれからだぜー!」

「盛り上がって行こー!」

「お前らはしやぎ過ぎんなよ」

「分かってやすって、橋田の旦那」

「翼何そのキャラ!」

「「「あははははは「「「

あいつら本当に元気だな。  
冷蔵庫から取り出したケーキを持ちながら、彼らの馬鹿らしいやり取りに耳を傾ける。

（確かに彼女は居ないが、それなりに楽しいクリスマスになりそうだな）  
ケーキまだかー！とか騒ぎ始めた彼らを見ながら、そう思った。

俺達の眠れないクリスマスはまだまだこれからのようだ。

それでも、  
やっぱり、  
彼女欲しー！

第1話 俺と奴等のクリスマスイブ（笑）（後書き）

やっぱりねー、彼女は欲しいんだよ、うん。

と言うことで、第一話はこんな感じでした。  
誤字脱字感想など待ってます。（特に感想）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3528z/>

---

並でいいじゃないか、並で

2011年12月12日00時50分発行